

外務省での勤務

平成30年11月
外交実務研修員 佐藤 貴宏
(岐阜県から派遣)

1 はじめに

2017年4月から、外交実務研修員として外交総合政策局軍縮不拡散・科学部不拡散・科学原子力課(通称:軍不原)で勤務しています佐藤貴宏と申します。早いもので、外務本省で二度目の冬を迎えようとしています。このレポートでは、私が外務本省で実際に勤務を経験し、感じたことを中心に記載させていただきます。参考になれば幸いです。

2 不拡散・科学原子力課での業務

軍不原では、核物質や原子力活動が発電、医療や農業等の平和的利用に留まることを確保し、軍事的目的への転用を防止するための政策等を担っており、私は主に国際原子力機関(IAEA)や経済協力開発機構原子力機関(OECD/NEA)等の国際機関に係る業務を担当しています。このうちの、IAEA関連で私自身が担当する業務を簡単に説明させていただきます。

(1) 日・IAEA保障措置協定

核物質は上述のとおり、様々な分野で利用されていますが、使い方次第では軍事転用し得るものであり、利用目的やその所在を厳密に把握しておく必要があります。日本は、核兵器不拡散条約(NPT)に基づいてIAEAとの間に「保障措置協定」を締結し、我が国の核物質の在庫量などをIAEAに申告しています。

また、IAEAは研究機関や発電所等を査察することで、申告内容が事実と相違ないことを確認し、日本の核物質や原子力活動には軍事転用がないことをIAEAとして「結論づける」ことが可能となります。こうした「保障措置」に係る外交的事務を軍不原が行っており、私は日本からIAEAへ提出する各申告やIAEAが行う査察の受入れに関する調整等を担当しています。

(2) IAEA年次総会

毎年9月に全加盟国が参加する「IAEA総会」がウィーンで開催されます。我が国からは、閣僚レベル*が出席し、政府代表演説や各国との会談等を通じて、我が国の原発事故後の取組、原子力政策の方向性、不拡散への取組、国際的な原子力平和利用分野での協力、といった各分野での取組に関する決意表明を行うとともに、各種政策のすり合わせを行っています。

(※第60回及び61回総会には松山政司内閣府特命担当大臣が出席。)

私は大臣の演説原稿、会談のアポ調整、会談用資料の作成に加え、宿舎の留保、配車の調整といったロジ業務等、大臣の動きがスムーズに運ぶよう、ウィーン代表部や関係省庁の担当者と連携して入念に調整を行いました。

また、総会期間中は現地に出張し、複数のイベントに関する総括的役割を担いました。対応にあたっては、自分の調整が大臣の動きに直結するという、ロジ業務の面白みと重大さを知ることができました。加えて、国際会議とはどういうものかを身をもって感じることができ、大変貴重な経験となりました。



松山内閣府大臣による政府代表演説



IAEA本部外観

3 外務本省勤務で感じたこと、印象に残ったこと

(1) 外務省職員の仕事ぶり

一言で言うならば、「~~仕事~~仕事スーパーマン集団」です。外務省職員の皆さまの仕事に対する意識と能力の高さには日々驚かされます。

日本の外交を背負っているという使命感の下に、時間外労働をものともせず、重大な外交課題に対して昼夜問わず立ち向かい世界中を飛び回る姿や、意思決定までのスピードには心底圧倒されると共に、自分自身の仕事に向き合う姿勢と意識を考え直させられました。

(2) 常に自分の考えを持つ

「君の考えは?」、「どういった観点からその結論に至ったの?」外務省では担当官がその事務のプロフェッショナルとして多くの意見を求められます。法令や規則等に従うだけでは判断しきれない事案を、担当官として何をすべきか、あらゆる情報から判断をしつつ自分の考えを同僚や上司に伝え、議論し、それが妥当な意見と判断されると速やかに行動に移す、時にはプレッシャーを感じることもありますが、常に自分の考えを持ちながら職務にあたることに大変なやりがいを感じました。

(3) 外務省での経験をどう活かす？

外務省では非常に幅広い業務を取り扱います。外交実務研修員についても配属先によっては、専門性が非常に高く、身につけた知識を自治体に戻ってどのように活用するのか、難しく感じることもあると思います。

しかし、多くの業務を経験し、その経験を蓄積し、次なるチャレンジ（業務）に活かす。これこそが仕事を進める上で欠かせない要素だと思います。また、それは具体的な知識だけでなく、仕事に向き合う姿勢や問題・課題へのアプローチ方法等周りから学ぶことも同様です。

これらの経験は、出向等を経験しなくとも学べる機会が多いと思いますが、外の世界で、経験したことのない分野に足を踏み入れることで、これまでとは全く異なった観点から多くのことを経験できる良い機会となり得ます。私自身、まだ外務省での研修は折り返してすらいませんが、多くのことを経験し、多くのことを学ばせていただきました。研修を通じて得た経験は自治体に戻り仕事を進める上で、必ずや糧となると確信しています。

4 最後に

私が今日まで外務省で過ごせたのは、軍不原をはじめ、外務省での環境が非常に恵まれたものであったからだと思います。

分からないことだらけの日々ですが、何でも相談できる環境があり、業務のマネジメントをしながらも、担当には十分な裁量を与える。そして、なにより、仕事以外のところでもコミュニケーションが円滑に取れる風通しの良さがあり、非常に恵まれた環境の中で本省研修を実施できています。

この学びの機会を与えていただいた岐阜県、そして、お世話になった軍不原の上司・同僚をはじめ、外務省でお世話になった全ての人に改めて深く感謝いたします。

残り少なくなった外務本省での研修においても、自分自身が出来る限りの貢献をし、多くことを学ばせていただきたいと思います。

最後の最後に、私と同様に毎年10名前後の外交実務研修員が地方自治体から外務省へ派遣されています。同じ派遣者同士、公私に渡り非常に良い関係を築くことができ、私自身としては、辛いと感じることもあった外務本省勤務を過ごす上で大変な励みとなりました。この繋がりは外務省での研修が終わったとしても失われるものではないと思います。



夏には外交実務研修生で旅行に行きました